

放送人の会

NO・19
2004・5・28
発行

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階
Tel&fax 03-3221-0019 E-mail info@hosojin.com
代表幹事 大山 勝美 編集担当 伊藤雅浩、松尾羊一

2004放送人グランプリ

久米宏氏とNステーション・スタッフへ

2004放送人グランプリ贈賞式は五月二十二日(土)東京都港区南青山・NHK青山荘・一階大ホール樺の間で行われた。今年度はグランプリの他特別賞が4。川口幹夫選考委員長の選考経過報告のあと、各受賞者へ賞状と琉球ガラス製のトロフィー、そして花束が贈られた。



特別賞 1

坂上浩子と「にほんごであそぼ」制作スタッフ

身体表現を通して日本語や古典に親しんだり、ユニークな出演者選びなど、クリエイティブな発想とイマジネーション溢れる方法で、幼児も大人も楽しめることも番組をつくりあげた

グランプリ

久米宏と「ニュースステーション」スタッフ

85年の放送開始以来、18年にわたって、すさまじい毀誉褒貶のなかで、伝えるべきことを伝えるべき時にわかりやすく伝え続け、テレビ報道の歴史を塗り替えるほどの圧倒的な存在感を示した。

特別賞 2

野中章弘とアジアプレス・インターナショナル

87年結成以来、フリーランスのジャーナリスト集団としてアジアの声を発信し続け、すぐれたビデオジャーナリストを輩出した。03年は特にイラク報道でその真価を発揮した。

特別賞 3

赤井朱実 (石川テレビ)

地方局にあって、広く深い目線で粘り強い取材を続け、独自の方法論を持つてすぐれた地域ドキュメンタリーを発表し続けてきた。03年は「もうひとつの学校」「奥能登 女たちの海」などを演出した。

特別賞 4

和田行と「白い巨塔」制作スタッフ

大ヒットのリニューアルに挑戦し、それを越えて現代人の精神のひだを巧みに描いて、時代と切り結ぶテレビドラマの原点を示した。脚本、演技、演出、技術、美術などを総合させたプロデューサーの手腕とスタッフに敬意を表して。

「放送人グランプリ」は一年に一回、その年度にテレビ・ラジオの番組で著しい業績を上げた人に対し、放送人の会の会員が推薦(ノミネート)し、それをもとに選考委員会で議論して決定する。今年度の選考委員は川口幹夫委員長以下、石橋冠、各務幸、露木茂、藤久ミネの四氏。

受賞者の挨拶

テレビ朝日ニュース情報センター・チーフプロデューサー

村尾尚子さん



「ニュースステーション」の最後の六年間のプロデューサーを務めました。私自身は立ち上げの八年間も番組に関わっていて、合計十四年以上番組と一緒に走りつづけてきましたが、自分たちの番組がどんなものか余裕をもって振り返ることはできませんでした。番組をやっているとき、外からはお褒めより批判、抗議が多かったのですが、番組が終わってこうして賞を頂くのは本当に光栄ですし、嬉しく思います。

「ニュースステーション」
オフィス・トゥー・ワン取締役・
谷崎聡一郎さん



私は後半の十三年間、つきあいました。最後を看取った組です。今久米宏は糸が切れた風みたいは何処に行ったか分かりません。事務所でも掴んでいません。一週間ほど前会った時はゴルフ焼酎で真っ黒になっていました。みなさんに「ありがとうございます」とお伝えくださいのことでした。今頃はどこか温泉などでんびりしているのだと思います。これからのことを考えているのかどうか、それもわかりませんね。

坂上浩子さん



NHKで幼児番組を制作しております。

野村万斎さんについてはお母さんたちから「腹から出す声が怖い」との嵐のような大クレームの電話がありました。その時は「おかあさんといっしょ」を永年やってきた先輩に『大変悪い』か『大変いい』かの評価以外は気にしなくていい」と勇気づけて頂きました。

お陰様で、この番組はお孫さんと一緒においさん、おばあさんもまっすぐくださる番組になりました。幼児番組の仲間にあちこち回遊するようにいろんな番組で仕事をしていますので、今日頂いたトロフィーもあちこち回遊するようにして飾るつもりです。

番組に協力して頂いている野村万斎さん、神田山陽さん、コニシキさんには是非喜んで頂こうと思います。ありがとうございました。

野中章弘さん



アジアプレス・インターナショナルはあまり知名度はありませんが、懸命に働いています。今もバグダッドに二名残って取材を続けています。私達は活字の分野から入って来たので、放送にはまだ未熟です。よろしくご支援ください。

赤井朱実さん



賞を頂けるとご通知を頂いて、そのことを社長に報告しましたところ、「それは何なのだ？」と全く知りませんでした。社長は新聞社から来た人で放送のことがまだよくわかりません。放送人の会のメンバーの方や、これまでの受賞者の方などいろいろ説明して賞の大きさを社長もやっとう理解しまして、「それはよかったですね」と言ってくれました。

地方局でドキュメンタリーを作っておりますと金食い虫のように思われ、肩身の狭い思いをします。それでもドキュメンタリーに固執してきたのは、一つは「え？なんで？なんですか？」という人一倍の好奇心と、持つて生きた権力が嫌いという気持ち。根底にあるからかも知れません。私が子供のころから見つづけてきたテレビには夢と希望がいっぱいあり、質の高いドキュメンタリーも沢山ありました。私はそこに近づこうと思つてやってきました。今日はお礼を言いに行きました。本当にありがとうございました。

和田行さん



「北の国から」はフジテレビの番組です。私どもの先輩である杉田成道監督が昨年立った同じステージに立てることを大変光栄に思います。

「白い巨塔」は僕が中学の時、二十六年前に放送され非常に衝撃を受けた記憶があります。自分が映像の仕事に関わることが出来たら一度は自分も映像化したいとその時漠然と思つていたようですが、今回それが実現出来ました。しかし、やるに当たっては、前作の田宮二郎さんの財前役がテレビ史に残る名作で、始まる前は、「リメイク」でしかも「唐

沢寿明で大丈夫なのか?」「井上由美子にあの原作の脚本が書けるのか?」「フジテレビの若造にあれば出来まい」など、いろんなことを言われました。放送が始まった当初は電話、メールで寄せられる感想は「前作に比べて底が浅い」といったものが多く落胆しました。

評価されないのは自分らの力がなからだ、とは思いましたが、やはり自分たちの方法、四十年前に山崎豊子さんがお書きになった医療の問題、医療裁判の問題を現在の問題としてわれわれはどう捕らえることが出来るのかという視点を守ろう、それでも前作に遠く及ばないということなら仕方がない、と思っていました。年明けのアウシユピッツのスペシャルの回あたりから好意的な反応が出てきました。

今回の表彰理由の中にあつた「リメイクを越えた」という言葉は私たちがやってきたことを励ましてくださる本当に嬉しい言葉です。ありがとうございます。

この作品は本当にみんなの力によるものです。今日はプロデューサーの高橋萬彦、演出の西谷弘が来ておりますが、出演者、音楽の加古隆、美術、化粧そしてADに至るまでこの番組を愛してくれました。実は最終回をまえに制作の裏側のドキュメンタリーを作りました。編集してみると、スタッフのそれぞれは自分のことばを持っていて、それぞれの角度でこの番組についてコメントし

てくれていました。

表彰理由の中の「総合」という言葉をあためて喜びたいと思います。原作者の山崎豊子さんに感謝し、こ

鶴沼だより⑫ 「これでいいのか?」

名譽顧問 川口幹夫

ことしの鶴沼海岸の冬は天候不良だった。おまけに一月二十三日に沖縄の国立劇場開場式のこけら落としに出かけた時も又、時ならぬ寒さで震えあがった。いつもは一月でも二十度近くかそれ以上ある沖縄では正に「異常」であった。

風邪をひいて、ほうほうの態で帰宅するに、暖かい筈の湘南海岸がまたうすら寒いのである。

「ヤレヤレ、これじゃ地球温暖化でなくて『寒冷化だ!』と毒づいてみたりしたが、一方ではイラクへの派兵問題があつたりして、どうもこれは勝手に地球をいじっている人間に対する天からの天罰かと思つたりした。

放送人の会の皆さんはどんな毎日を送っているのかな? と心配していたが、相も変わらず視聴率問題が世の中を騒がせている。

世の中が騒がしくなってきたら、それをどうやって収めるかが放送人の第一の目標だと思つていたら、どうも自らがその火の元になつていたとは!

れから更に新しい作品への励ましを与えて下さつた皆さんに心からお礼申し上げます。

自ら省みて、自分自身を向上させるのが「放送」のあるべき姿だと思うのだが、甚だ困つたことである。

先ず放送の経営に当たる人は、収益のことを二の次にしてどんな放送で世の中のためになつてやろうかと考えて欲しい。現場に働く人たちは、自分たちの仕事が多様な世の中役に立っているか、と考えて欲しい。

少なくとも、害になること、迷惑になることは絶対にやらない!と誓うべきだ。

「放送だつて饅頭を食つてやるわけには行かないよ!」とおつしやる声が聞こえてくる。

勿論「清貧に甘んじよ!」とか「視聴率は問題にするな!」とかしたり顔をしていう気はサラサラない。

大いに儲けてほしい。視聴率だつて低いより高い方がいいのは当然だ。でもどこかで踏みとどまつて、「これでいいのか?」と自問自答して欲しい。

そういう自問自答が続いている限り放送は「よき文化」であり続ける。少なくとも「悪い文化」に墮ちることだけは免れると思う。

放送人諸君、ほんのちよつとの自省があれば、悪くなる筈はないのだ。

第7回総会・青山荘で開催

2004年度、第7回総会は五月二十二日(土)NHK青山荘(営団地下鉄表参道駅近く)1階大ホール樺の間で開催。川口名誉会長、大山代表幹事の挨拶のあと、2003年度活動報告、会計報告、2004年度活動方針、予算案を承認した。2003年度決算と2004年度予算については、左表をご覧いただきたい。

会則の一部変更については、「会費を二年以上滞納したときは、退会したものとみなす」の規定を削除、役員への項に「必要に応じて副代表幹事をおくことができる」を追加、幹事の項に「代表幹事は、必要な場合、会計監事を委嘱することが出来る」を追加した。

この後、放送人グランプリの贈賞式、懇親会が行われ、会は楽しい雰囲気であつた。

【幹事】

- | | | |
|--------|------|--------|
| 石橋 冠 | 石井清司 | 伊藤雅浩 |
| 大山勝美 | 荻野慶人 | 加賀美幸子 |
| 各務 孝 | 北村充史 | 今野 勉 |
| 斎明寺以玖子 | 澤田隆治 | 鈴木典之 |
| 野崎 茂 | 久野浩平 | 堀川とんこう |
| 松尾羊一 | 明神 正 | 村木良彦 |
| 山田良明 | | |
| へ以下新任 | | |
| 磯村健二 | 沖野 瞭 | 寒河江正 |
| 坂元良江 | 田澤正稔 | 中澤忠正 |

2003年度会計報告

前年度繰越金	3,503,733
2003年度収入	7,829,276
2003年度支出	6,992,202
次年度繰越金	4,340,807

2004年度予算

収入	10,140,807
支出	
一般管理費	3,480,000
人件費	1,100,000
事務所費	400,000
通信交通費	500,000
会議費	300,000
印刷費	500,000
各種謝金	150,000
ウェブサイト管理費	380,000
事務用品費	100,000
雑費	50,000
事業費	
研究・名作の舞台裏	1,200,000
人気/ベスト番組	300,000
シンポジウム	500,000
放送人の証言	700,000
放送人グランプリ	250,000
放送論研究会	150,000
ラジオ・プロジェクト	150,000
予備費	200,000
次年度繰越金	2,710,807

中田美知子 長沼士朗 山崎 裕
 山田 尚 和田光弘
【地域幹事】
 北海道地区：中田美知子 (FM北海道) 林健嗣 (札幌テレビ)
 東北地区：市村元 (テレビU福島)
 北陸地区：金沢敏子 (北日本放送)
 赤井朱美 (石川テレビ)
 中部地区：岩井まつよ (信越放送)
 近畿地区：澤田隆三 (毎日放送) 横

山英治 (讀賣テレビ)
 中国地区：曾根英治 (山陽放送) 林裕史 (山陰放送)
 四国地区：大西康司 (南海放送)
 九州地区：村上雅通 (熊本放送) 中村耕治 (南日本放送)
【各委員会の構成】
事業委員会
 委員長 今野 勉
 委員 久野浩平、各務孝、荻野慶人、

石橋冠、齋明寺以玖子、坂元良江、田澤正稔、山田良明
【広報委員会】
 委員長 松尾羊一
 委員 伊藤雅浩、鈴木典之、齋明寺以玖子、田澤正稔
【総務委員会】
 委員長 北村充史
 委員 村木良彦、野崎茂、明神正、磯村健二、坂元良江
プロジェクトメンバー (チーフ)
【事業】
 放送人の証言：久野浩平
 名作の舞台裏：石橋冠、荻野慶人
 放送人の世界：今野勉、坂元良江
 シンポジウム：齋明寺以玖子
 会員・現場交流：田澤正稔、山田良明
【地域交流】
 会報：松尾羊一
 ウェブサイト：伊藤雅浩
 放送論研究：野崎茂
 ラジオ・プロジェクト
【総務】
 グランプリ：村木良彦
 事務局：北村充史

各委員会におきましては、各委員の皆様と運営方よろしくお願いいたします。なお、プロジェクト・メンバーのうち、
【地域交流】及び**【ラジオ・プロジェクト】**の構成につきましては、目下検討中であります。

受賞しました

石橋 冠

この三月、芸術選奨・文部科学大臣賞をいただいた。
 「驚き」と「面映さ」の狭間に喜びはすっかり沈没してしまっただが、賞状のなかに「ラブレター」の演出とあったのが嬉しかった。

ドラマ「ラブレター」は自分にとつてとても愛着の湧く貴重な仕事であった。なによりも、この年齢になつても、まだ「自分は変わらぬ」という、かけがえのない希望を残してくれたからだ。現役の老兵にとつてこれに優る嬉しさはない。

「ラブレター」の撮影現場で、私はいつになく大胆で奔放であった。どこかに最後の仕事にしようという意識もあり、胸の中にわだかまる一切を現場で吐き出そうという衝動もあった。

その三年前、私はおなじ浅田次郎原作の「角筈にて」を西田敏行主演で撮っており、今度も同じ座組だから、ちがう手法で行きたいと思ったのは確かだった。だが、私をこの奔放さに駆り立てた真の要因は、後輩のこの一言だった。
 「爺イが頑張るから、俺たちの機会が減って参りますよ。みんな言っ

てます。」

グサリときた。冗談めかして励ましてくれたのだろうか、グサリと響いた。その頃私は、自らの怠惰を巧みに合理化し、努力を経験で補う「ペテラン仕事」に踏み込んだ自分に、虫唾が走っていたからだ。

撮影台本のいたるところに殴り書きがある。「自分の文体を破壊せよ」「ドキュメントとドラマの融合」「混乱を作り出し、それを武器に」「飾るな」等々。

私は自分を挑発し、とかく腰砕けになるわが性癖を戒めていたのか。

冒頭は雄大な北海道の風景の中だった。三頁にわたるシーンを手持ちカメラで主役のアップだけで押し通し、撮影を了えた。いつもなら二十カットは撮ったであろう。周りには悟りそなった沢山の顔があった。

そして、撮影が終わったとき、いつも襲ってくる悔恨はからきしなく、初演出をしたときのような傲慢な達成感があった。

私は、自分の作品をあつとで観ることはないが、「ラブレター」は繰り返して何回も観た。そして、まるで他人の作品のように様々な刺激を受けるのだ。自慰的な感興にちがいないが。

「ラブレター」は愛しい作品だ。それが受賞の対象になったことは幸福であった。

「受賞の感慨を」と問われると、この賞の凄さに驚いたと言うしかな

い。

多くの人から引きもきらぬ祝辞をいただき、北海道から面識のない親戚が飛んできた。私と妻とは夢のような花畑の真ん中で、鱒のひらきをつつくというシュールな体験もした。

さらに驚いたのは、この賞が私に苦行を強いたことだ。文化庁役人の「発表までご内密に」という電話の声の原因だった。発散型の私には重いプレッシャーだった。反動で私はひたすら内向し、かつてない厳しい自己検証をはじめてしまったのだ。

七回も芸術祭参加作品を演出し、ことごとく落選している。スポーツだったらワースト記録だろう。何で自分が受賞するのか。この賞の名称の偉大な響きと、かくある自分のあまりのへだたりに愕然とするのだった。

恐怖と孤独が募り、それが「面映さ」を増幅させた。

私は、正式発表を待たずして、重症の「面映さパニック症候群」という新種の病気に苦しむ始末だった。これもこの賞の妻さだったのか。

時が過ぎ、ある日、私はハタと思いついた。私の場合は「激励賞」だったのだと。そう思ったとたんに、安堵が広がった。

ひとりごちた。この賞は、看板に似合わず優しいところがあり、せつせとやってきた古参兵に励ましを与えてくれたのだ。才前の才覚はもう一息だが、頑張れと。

「頑張ろう」、そしてこの過褒に少しでも近づきたいと思つた。その張り合いを与えて下さったことに、いま感謝がつきない。

南船 北馬

5月の10日間

戸田 桂太

- 5/1 車で都心へ。風が心地よい爽やかな五月晴れ。新宿でメーデーのデモにぶつかる。メーデーも連合は連休初日の29日にやってしまうので、これは連合以外の組合なのだ。
- 「メーデーを放棄した労働者……」などとほざく。乃木坂のTOTTOの本屋へ。建築関係の本数冊と飯沢耕太郎『東京写真』を買ってから、白金の蕎麦屋で鴨せいろと飯餅。
- 5/2 連休というのにメールがどんどん来る。ぜんぶ大学の関係である。休日返上らしい。返信と連休明けに必要なレポート作りで終日忙殺される。
- 5/3 娘一家に誘われて三浦半島の海岸へ。小さい孫たちといっしょに磯でカニを捕まえたらいソギンチャクをつついたりして遊ぶ。夜、
- 5/4 天気がわるい。相模湾波高し。八景島の水族館へ。巨大水槽のインパクトは大阪の天保山が勝るか。
- 5/5 終日在宅。野村訓『レンズの向こうに自分が見える』(岩波ジュニア新書)、『ナンシー関大全』(文芸春秋)、『DAYS JAPAN』2号など。
- 5/6 大学へ。2週間ぶりの授業ひとつ。社会学部の1年生に書物の文庫と新書の違いについて説明する。ほとんどの学生がこれを知らないそう。
- 5/7 NHK時代の旧友と会う。無明の酒といえども、清談に終始することいづものとおり。
- 5/8 中央高速で藝科の定宿へ。あした松本の友人(蝶仲間)を訪ね、信州某所、特に名を秘すヒメギフチヨウの生息地に同行するため。
- 5/9 朝早く藝科を出発するも、途中で雨となり、やむなく中止。松本で友人に逢い、立ち話15分、おみやげの交換をして来年の再会を期して別れる。
- 5/10 放送人の会の原稿依頼のハガキ発見。この稿を書く。随想といつてもひと様にお伝えするような想いもなく、時評はおこがましく、テレビはろくに見ないので短評といえども書きようがない。そういうわ

だけで、つまらない近況報告で御勘弁を願いました。

(NHK・OB、武蔵大学教授)

テレビ番組の活字化

片島 紀男

自己宣伝で恐縮だが、今年六月に、自作『炎の人』のゴッホの如く熱く燃えながら五十四年の生涯を生きた劇作家三好十郎の評伝を出版する。

私は三十年前、赴任先の佐賀にいた頃、地元の若手劇団が郷土出身の三好十郎の作品『殺意』の公演に取り組んでいることを知り、十五分の番組を作ったことがある。以来、三好は忘れられぬ存在となった。

上京して十六年目、劇団民芸の滝沢修が死去したとのニュースに接し、滝沢の生涯の当たり役に三好の『炎の人』のゴッホがあることから、それまでに収集していた三好の作品や資料等に改めて目を通し、三好十郎生誕百年記念として番組を企画。学生時代、吉本隆明が発行する同人誌『試行』に連載されていた『三好十郎との対話』の著者宍戸恭一氏に取材し、宍戸氏から吉本氏を紹介して頂き、『吉本隆明が語る・炎の人三好十郎』を放送した。

しかし三好の生誕から死に至るまでの魅力ある全体像を伝えるには、放送時間も短く、様々な制約もあり、少々悔いが残った。

そこで、これまで三好の詳細な評伝が世に出ていないことを知り、それなら自分で書いてみようかと思ひ立ち、手元の資料をもう一度整理し、宍戸氏からも手持ちの膨大な資料を送ってもらい、一気に本を書き上げた。

これ迄にも私はいくつか番組を本にしている。『東条内閣機密記録』を作るにあたり東条首相秘書官広橋眞光氏から入手した膨大な未公開資料を、『植谷雄高・独白「死霊の世界」』を作るにあたり植谷氏に行った膨大なインタビューを、また『戦後史の謎・三鷹事件』を作るにあたり集めた内外の資料と証言を活字化し出版した。

私は九州時代から尊敬していた木村栄文氏や川西到氏、森弘太氏が自らのテレビの仕事で、それぞれ記者菊竹六鼓の生涯、与論島を出た民の記録、三井三池炭塵爆発・CO中毒患者の記録として活字化し残していることに一種の憧れを抱いていたので、これで少しは仲間入りが出来たかなと一人ひそかに喜んでいる次第である。

テレビ番組の国際フロー調査

川竹 和夫

私たちはNHK文研の協力を得て二十五年前にICFP(テレビ番組国際フロー研究プロジェクト)をつ

くり「テレビ番組の国際的な流れ」について調査研究を続けてきた。最近、二〇〇一〜三年に第三回目のグローバル規模の調査を実施したので、その結果のほんの一部を紹介させていたたく。

まず、日本へのテレビ番組の輸入は全編成時間(東京キー局)の約5%と二十年來変わらないのに対して、輸出は年間42600時間と大幅増、その結果輸出入バランスは「輸出14 輸入1」となった。

輸入番組は80%がアメリカの映画・ドラマである。(深夜放送が60%)一方、輸出先はアジアが半分近く、アメリカ・西欧向けもアニメ中心に好調である。アメリカは、日本アニメとキャラクター・グッズなどで、年間5000億円以上の売り上げと推定される。

西欧ではオリエン・フィッチェアものに拒否反応があり、アニメでも、日本社会を描くものはほとんど受け入れない。ドラマ『おしん』は世界59国に売れているが西欧ではベルギーのみ。欧米での日本イメージは各国で制作されるドラマやドキュメンタリーを通じて形成されるが、そのイメージは平均して古典的ステレオタイプである。

今回の調査で、日本からの輸出がもっとも多かったのは台湾だが、台湾では26のチャンネルで日本製番組を放送しており、うち3局は日本専門局である。アニメ、バラエティ、ドラマが三分の一ずつ。ほぼ日

本と同時進行である。若者向けには一昔前のトレンドディー・ドラマが繰り返し放送される。

次に韓国は、日本大衆文化輸入の解禁が最終段階に入っているが、日本のドラマは、ケーブル局のみ解禁になったばかり。日韓共同制作のドラマ『フレンズ』『ソナギ』などに日本人タレントが出て人気を博したのが話題になるという段階である。韓国では外国番組の輸入制限をする一方で、積極的な国産番組奨励策をとっているが、これが効を奏して最近ドラマ、映画のアジア向け輸出がポピュラー音楽と共に急増し、「韓流」と呼ばれて、日本製大衆文化との市場合戦が話題になっている。

中国では、2001年「ゴールデンアワーの外国ドラマ禁止」の措置がとられ、日本からの輸出は大幅に減少した。しかし中国の国産番組はその多くが日本のどらま、バラエティの剽窃である。中国で日本を扱ったドラマは日本人の悪逆を描くものが殆どだったが、最近では『永遠の恋人』のように、主人公の日本人青年を好意的に扱ったものも出てきた。ただ報道では、まだ日本イメージはネガティブである。

その他中東各国では、日本のテレビ番組は例外なく好評である。検閲で、わいせつ、暴力は受け入れられないのでテレビの日本イメージは常に良好である。

最後に、日本からのテレビ直接発信について。現在外国向けの直接衛

星放送はNHKの2チャンネル（いずれも日本語中心）だけで、他は、衛星料金高騰に伴い撤退した。いわゆる国際放送はゼロである。NHKで日本発の国際ニュースチャンネル計画（GNN構想）が進められた時期があったが、その後沙汰済みである。NHK主導でできたニュースの交換ネット『アジアビジョン』（本部長アラルンプール、10国参加）も、理想とした「アジアからの発信」の機能を果たしていない。

防空壕の中のジャズ

佐藤 利明

先日、横浜みなとみらいホールへオーケストラを聴きにいききました。パーカッション奏者の友人からの誘いだったので。彼とは六十年ほど前の中学時代からのつきあひになります。

音のよい三階席からオーケストラの演奏を聴き、白髪を震わせて小太鼓を連打している友人の姿を、遠くから観ている内に、私は六十年前に初めてジャズを聞いたときのことを思い出したのです。それも奇妙な夕イミングで。

私たちの母校は第二東京市立中学校ですが、卒業後は新制になり都立

上野高等学校と名を変えました。つまり私たちの中学生時代は、日本の敗戦を丁度真ん中に挟んでいるわけです。今思えば凄いな時代だったといえます。

戦争の末期では、私たち中学生も勤労働員になり、軍靴工場に働いていました。空襲警報が鳴ると作業は中断して地下にある学生ばかりの防空壕に避難します。八畳間ほどの広さですが、空襲の合間には、お陰でちよつと息抜きが出来るのです。あの日のこと、今度空襲があつたら秘かにジャズのレコードを聞こうという奴がいます。後のパーカッション奏者の彼でした。生憎私は敵の音楽とされるジャズは、言葉は知っていないが聞いたことはない。悪いけど、次の空襲よ早く来ないかなと願ったものです。

待望の空襲警報サイレンが鳴ると、私は地下防空壕に走りまわりました。噂を聞きつけて何人かの同級生たちも壕に飛び込んでいました。一番奥まつた壕の真ん中にゼンマイ駆動の蓄音機がおかれ、車座になった中学生が見守る中で七十八回転の黒いレコードが回り始め、針が下ろされました。

当時の私たちにはもう馴染みになつていいる爆撃音が地を伝わり壁を震わせていました。しかしそこで聞いた音の甘美さはどういへばいいのでしょうか。ジャズとはこれか。私の抱いた感想を正直にいうと、この音は人を腑抜けにするぞという奇妙なものでした。

確かタイトルは『春風に乗って』だったと記憶しています。今思えばバリバリのデキシードランドらしかった。生きている間に再び聴けるかどうか。

ラジオを作ろう

横山 英治

4年前、報道から事業職場へ移動。イベントの企画からやりくり、精算の技を覚えしました。今、放課後にも大阪・生野区の中小零細企業のものづくりによる地域おこし活動に入れ込んで、民放労連近畿地連で組合活動に取り組んでいます。

以下、地域と労働組合でこの夏に取り組む、こどもとのラジオづくりイベント計画を紹介します。

かつて理科好きの関西の小学生たちは、大阪日本橋の電気屋街をたずね、部品をひとつひとつ買い集めてはラジオを組み立てた。自分が組み立てたラジオで初めて「音」が聞けた時、これまで見えなかった「電波」が「見えた」と思えたものである。

エレクトロニクスの初歩とメディアの初歩を初めて学んだ。そして育った子供たちがエン지니어となり、メディアの制作者となった。現在もラジオのキットは多少は販売され、学習研究社の「大人の科学」は大変な人気を呼んでいる。では、そのギッ

トから開発してみようではないか。しかもメロド・イン・ジャパンで、最高の品質、最高のデザイン、最高の性能のものを地域製造業と開発し、工業高校を舞台に、メディアのエン지니어が直接指導し、子供たちに作ってもらおうのだ。パートナーは大阪・生野区の中小企業の勉強グループ。焼け野原の中に、デザインをイタリアに学んで、魅力あるものづくりの再興をめざすグループである。彼らのワザをもつてすれば、金属、皮革、高分子化合物に、和紙、時計、造花、ありとあらゆる素材加工が可能である。世界最高のメロド・イン・ジャパンの基礎技術そのものなのだから。同様な東大阪のグループは、今宇宙をめざして人工衛星作りに動いている。彼らは今、夢をなくした日本企業の中で、たくましく明日をめざすグループといえる。

さらにもう一つのパートナーは、大阪市内の子供たち。ものづくりの都、東洋のマンチェスター大阪は、今瀕死の重傷にあえいでいる。しかし、希望はただ一つある。子供たちが増えているのだ。彼らに夢を託そうではないか。

この子供たちにエレクトロニクスと番組ソフトの「ものづくり」を教えることのできる実力集団は、いまテレビ、ラジオの職場に働くもの、すなわち我々をおいてほかにない。8月28日に開催予定。ご支援をよろしく願ひ致します。

（讀賣テレビ・事業局）

★ 2月15日(日)情文センターホール
 第8回 名作の舞台裏
 連続ドラマ番組「君の瞳をタイホする」
 (フジテレビ作品)



ゲストに当代人気の大スター浅野ゆう子、陣内孝則をむかえ、場内はコンサート会場のような熱気の中で開かれた。スタッフの関係者は太田亮、河毛俊作、山田良明の三氏が出演。司会は石橋冠氏。

日本版「ボリス・アカデミー」の面白さ、スピードとズッコケ、いわゆる新しいトレンドディードラマの誕生がこのドラマである。浅野ゆう子にとって初めての本格コメディの体験。浅野「女優はそんなことはない」と思っていたら、

河毛さんは「そうだ。浅野ゆう子は水洗トイレの水で長い髪を濡らしたりはしない。しかし、この婦人警官はするのだ」とやらせたんです。

陣名は途中何回かキレて帰ったことがあったとか。ハイテンションのバラシッこの会話が爆笑を呼んでいた。チームワークの良さ、楽しさはフジテレビの現在の元気の反映かと思つた。

☆ 3月7日・14日・21日(3回連続)
 第六回「放送人の世界」公開セミナー
 佐々木昭一郎と作品
 聞き手 今野勉

『紅い花』『七色村』などを除きフィルムによる作品ゆえ、佐々木アンソロジーは消えずに残り、今なお映像文化に関心をもつ若い層の支持を得ている。

連続3回のセミナーは映像作家志望の人や学生層で埋まった。まずラジオ時代の傑作(『都会の二つの顔』『コメット・イケヤ』)から。テレビ作品では『マザー』『さすらい』『四季・ユーロピヤ』『川の流ればバイオリンの音』『七色村』。詩的にして異能、かつ複雑にして聖性を帯びた独特な佐々木ワールドが集中的に公開されたのは初めてだろう。氏の熱の入れ方もハンパじゃない。各界の佐々木サポーターが寄せた「カイエ・ノワール」は5、60ページに近い「書」で、これをタダで会場に配った! この人、まだまだ放送界の現役左腕投手とみた。

☆ 3月28日(日)情文センター会議室
 第一回 私のベスト番組
 白坂依志夫と『マンモスタワー』
 聞き手 大山勝美

問題意識にみちた作品の当事者(脚本家や俳優、演出者)を主役に招き、選んだ作品を手掛かりに、時代の風を解明してゆく映像とトークの集い。今回は映像マスコミの主導権が映画からテレビへ移行する時代を描いた作品の周辺を白坂氏にきく試み。

増村保造監督と組み大映映画に異色な足跡を残した氏が『マンモスタワー』(演出・石川甫)成立の裏話を披露、「つかみどころのない怪物」をめぐる当時のテレビ観は興味深いものがあった。会場はほほ満員(テレビや映像関係、メディア研究者など)で、テレビ史的作品と時代の相関を考える「私のベスト番組」への関心の高さを示していた。次回を期待したい。(編集部)

『現場と語ろう』シリーズ

第一回『白い巨塔』の現場スタッフ

日時・6月12日(土)
 午後2時〜6時

場所・フジテレビ(湾岸本社)
 オフィスタワー10F

「最終回」上映のち懇談
 出席者・和田行プロデューサー、共同テレビプロデューサー ほか
 放送人の会 有志 視聴人の会

連載 放送界多頻語事典

NエッチKブックス刊

捨てカッター：夏なら樹に止まる蟬。秋、池に浮かぶ紅葉。冬、はらはらと舞う雪か煌々と三日月。春なら梅に鶯。場面転換で花鳥風月をあしらうのが編集マンの妙。「ニホンの映像にはハイク趣味があり、あなどれぬ」と某外国映画人は深読みしていたが、さてさて、ヘイタイ：：報道局の新人のこと。

取材班では「集まれ!兵隊」とデスクが取材先を指名してはヘイタイが散る。勘定 ワリカンが平等に割るがヘイタイ勘定とは飲み食い代を夫々が支払うこと(解)ノミ助と下戸混在の報道局ではヘイタイ勘定が常識である。ヨシノヤ：：かつて連ドラのCPは「吉野家の精神でいこう」と。ココロは、作りがうまい、制作費が安い、仕事早い。今は「吉野家じゃあ数字が取れねえ」とDはコボす。お目当てのジャニーズ系主役が欠けた「牛無し」豚丼ドラマを抱えてるから。

カツ丼：：某ラジオ局ではやった形容詞。「アイツの態度がでかいのはカツ丼だからだ。だっておやじは巨大代理店Dの重役だもの」。てんぶらは大学生、カツ丼はコネ入社の局員を指す。因にアルバイト昇格組はキツネうどんで、太ってるのはタヌキそばと呼ぶ。ココロは、これが意外に大化けするんだなあ。草創期社員の差別用語。(四谷亭 鶯)

「デジタル革命」と、あえて「革命」という漢字を用いるのには訳がある。あまりにも急激な変革をもたらすからである。

この革命でデジタル放送を見るにあたっては、受像機を買い替えるか、チューナーをつけなければならない。白黒の放送がカラー化した時は、白黒の受像機でも放送自体はそのままで見ることができた。ところが今度は違う。アナログのテレビでは、デジタル放送は映らない。

アナログ放送の終了は2011年と定められている。視聴者は、それまでに受像機を新規のものに変更しなければならぬ。これについては順調に移行出来るという説もあるが、「買い替えるのはまだ先だ」と見る向きも相当ある。確かに大型のプラズマや液晶の薄型テレビは値段が高いにもかかわらず、よく売れている。しかし、購買層の中心になる、小型で低廉な価格のデジタルテレビの発売はまだ先になりそうだ。

はたして、2011年に本当にアナログ放送を終了することが出来るのかは、デジタルテレビの普及にかかっている。この点がまだ読み切れないのだ。放送界のデジタル革命で、視聴できるチャンネル数は大幅に増えた。首都圏で、今、いったいどれ位のチャンネルが見られるのか数えてみた。

地上波 (アナログとデジタルは同

一のものともみなして計算する)

NHKが総合と教育、日本テレビ、TBS、フジ、テレビ朝日、テレビ東京、独立U局が東京メトロポリタン、テレビ神奈川、千葉テレビ、テレビ埼玉で小計4。放送大学も入れれば合計で12チャンネル。

BS (アナログとデジタルは同一のものとして計算する)

NHK1・2とハイビジョン、BS日テレ、BS朝日、BS11、BSジャパン、BSフジ、WOWOW、スターチャンネル。WOWOWは3チャンネル編成の時間が結構あるので、3つに計上すべきか……。

放送論壇

デジタル革命のその後

斎藤守慶

CS 今年3月現在では、1110

度CSでテレビ62チャンネル。従来のスカイパーフェクトTV197で、合計259。ただし重複しているチャンネルが48あるので、実質合計は211チャンネル。

じつに、首都圏で見られるテレビは235チャンネルもあることになる。重複部分を全部加えると259チャンネル。これだけでも相当な数だと思いが、「革命」はまだまだ続くのである。

今後増えるチャンネル 車や携帯

端末向けに衛星から電波を送るモバイル放送(東芝・トヨタ・日本テレビ等

が出資)は今年3月に衛星の打ち上げに成功、夏から放送を開始するという。こちらは映像系がニュースやスポーツ中継など9チャンネルあり、音声系は60チャンネルあって、視聴は契約制で月額料金千円から三千円程度だという。

家や会社だけでなく、外出先でも、車の中でもデジタル放送の視聴時間が広がるわけだ。携帯向けと言えば、地上波デジタルテレビの携帯・移動体向け放送も来年頃には放送が開始できる目途がたった。

話はまだ続く。現行のアナログBSは2011年の放送終了が決まってい

る。その後、衛星をデジタル放送用に転用すると、全部ハイビジョンなら、8チャンネル程度は可能といわれている。さらに、日本が国際的に認められている新たな衛星の権利を行使すると、全部ハイビジョンとして、さらに8チャンネル、と続く。

当然、その間にブロードバンドはますます普及して通信の世界では、放送と同じような映像配信サービスがさらに増えてくるだろう。

視聴者にとっては、選択の幅がますます広がることになるが、放送事業者側にとっては、とてつもない過当競争の中で、放送業界より資本力、体力

争いの中で、放送業界より資本力、体力が大きい通信業界との大競争を繰り広げていくことになる。

110度CSは、BSデジタルと同じアンテナで見られることから普及が期待されたが、あまり伸びていない。ブラットフォームがスカパー系と日テレ・WOWOW系の2つがあったが、さきごろ統合された。また、この前後には不採算チャンネルの撤退があった。

「革命」の中、多チャンネルという荒波に立ち向かうには、やはり魅力ある番組内容で視聴者の支持を得ないと生き残れない、ということだろう。

他方、先に述べた今夏に始まる「モバイル放送」のライシナップにしても、全くの新規のチャンネルではなく、CSなどでこれまで出ていたチャンネルが、「家ではCSで、出先や車の中ではモバイル」という風に展開する例が多いと聞く。競争力のあるところは幾つもの媒体に露出できる、というように強弱の差がますます顕著になる、ということだろう。

問題は一般的にリピーターが多い点である。いかにも番組ソフト(コンテンツ)不足の感が否めない。リピーターはコマースやテレビショッピングでも行き過ぎる点に気がなる。例えば「電動野菜調理器」や「ピンポイントシェーバー」等々、これは度をこす再放送と言うべきで、視聴者の反発を招く恐れがある。

ニュース番組もCSでは「見損ねて

放送人の証言 6

国敗れて、放送在り (上)

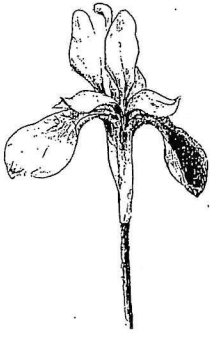
久野浩平

もいつでも見られる」というコンセプトであることは承知してはいる。しかし、ニュース素材が限られており、あまりのリビートは、素材不足、内容の低下という評価を受けてしまうだろう。これだけチャンネルは増えてきたもの、それでは一体、世間の人々はどれ位の時間、テレビを見ているのだろうか。いくつかの調査があるが、だいたい一日当たり3時間半が限度といわれている。そして、この長さは長らく変わっていない。しかし、チャンネル数だけは増えて来た。

これはまさしく過当競争、供給過剰で、放送事業者は随分と苦しいが、むだな競争をしているといえないだろうか。正直に言えば、100チャンネル位が適当量ではないか。

「革命」は放送業界だけでなく、ブロードバンドを持つ通信業界も巻き込んでますますスピードアップし続けることだろう。視聴者に支持されるよう放送の「質」をキープし続け、放送がこれまで築いてきた文化の担い手としての役割をわきまえて、この「革命」が、世間の人々に受け入れられる形で進行していけば、と念じている。

(毎日放送 相談役名誉会長)



て活躍する日本電波ニュース社の華々しい存在感に周知のことです。

長澤泰治さんは一九三六年NHKに入局しました。主計課を経て出征、四〇年に帰還し報道部に転属。四一年報道班員として南方に派遣されます。

今回は報道情報関係の数々の「証言」の中から戦時中、敗戦直後の放送界の状況に触れた語りを集めてご紹介することにいたします。

まず 柳沢恭雄さんの「証言」です。柳沢さんは一九三八年NHKに入局、海外放送から報道部に移りました。

「戦局がこう怪しくなってきました、勝っている時はいいんですけども、もう戦争末期なんてものはね、(陸海軍)報道部の連中自身が毎日レクチュア受けるんですがね、あのおう、軍令部が碌なことしゃべらないんですよ、内容がだから、朝、レクチュア受けてくるんだけど、それをまた僕は聞くんですが、そんなもん聞いたって記事になりませんね」

疑惑に満ちた大本営発表に悩んだ経験が戦後柳沢さんに自主取材の必要性を強く主張させる根拠となり、NHK独自の放送記者誕生の道を開きます。

五〇年、朝鮮戦争勃発の後、レッドパージで柳沢さんはNHKを退局します。そして六〇年、冷戦下の東欧諸国のニュースやドキュメンタリーを取材制作、NHKをはじめ民放各局に配信するプロダクション、日本電波ニュース社を設立することになります。

「ゲリラなんですよ。こんなもの成り立つか否か、どうなるか確信がない。しかし放送ジャーナリズムの確立という確信はあったが、組織体がどう育つかなどわからなかった……」

後にヴェトナム戦争、ペルーの日本大使館占拠人質事件、アフガニスタンやイラクなど、国際紛争のホットコーナーでは多くのマスメディアに先駆け

連、武林無想庵、北大路魯山人、林芙美子など)の思い出が「証言」の中心をしめております。

藤倉修一さん。一九四〇年アナウンスラーで入局。仙台局から福島局へ。それが現場のスタートでした。

「(承知の通り通信省、情報局の監督下にありましてですね、禁止事項で毎日のように監督官から来てです。ね、禁止事項の合間を縫って我々は放送したんでね(中略)開戦となると更にそれが増え、情報局からも禁止事項は来るし、軍部の方からも来る。だから、ま、かんじがらめになり毎日のように監督官から直接電話で『禁止事項一本お願いします』ってくるんですよ」

あるとき、グライダーショーの実況中継で突然の墜落事故があり、つい本当のことを喋ってしまった、監督官によって放送中断、担当の藤倉アナはあやうくクビになりかけた秘話が続く。

さすが名アナの語り口は一篇の「娯楽トーク番組」であり、証言テープを是非とも見ていただきたいものです。

戦後、藤倉さんの「街頭録音」が「下下の女たち」のクラクチュウのオトキインタビューの衝撃はあまりにも有名ですが、この間の事情、後に更生したオトキ再会の話(「社会探訪」)、さらに「二十の扉」「紅白歌合戦」などに及んでおります。

秦豊さんは一九四四年、警報放送要員としてNHK松山局に採用され、戦後はアナウンスラーに正式採用されましたが、柳沢恭雄「証言」でも触れた五〇年のレッドパージ禍で退局を余儀なくされました。

「レッドパージはね、昭和二十五年六月二五日朝鮮戦争が勃発した日に、日本共産党の党籍をもった連中はその

日にすばっと即日パージだったです。で、僕たちのようになんら党籍も無い、共産党でも社会党でもない人間はどういう扱いを受けたか。第二次レッドパージと俗称されましたが、六月でなく八月下旬にですね、英文と日本文と両方、二枚の辞令を受け取るわけなんですよ」

「それには解職するという文言はひとこともない。『爾今一切日本放送協会全施設に立ち入ることを禁じる。連合軍最高司令部』、たったこれだけなんですよ」

翌五一年、秦さんは開局を目前にした民放、福岡のラジオ九州（現RKB毎日）に入社します。慌ただしい開局の思い出、報道部門の整備など当時の状況も語られています。何と云っても秦さんの「証言」の中心になるのは六五年に起こった「ひとりっ子」事件です。

右翼の脅迫による芸術祭参加ドラマの放送中止というこの事件は多くの人が知るところですが、秦さんはプロデューサーとして事件の渦中にあり、その経緯、裏の事情や動きなど、報道記者ならではの精緻さで具体的に語っています。因にこの件に関しては私も当事者の一人としていずれ「証言」を残さねば、と考えておられます。

テレビ（NETテレビ朝日）やラジオ（文化放送）の報道キャスターを経て政界入りした秦さんは、残念なことには昨年夏（〇三年）亡くなりました。同じ時期、やはりNHKでレッドパージに遭った國枝忠雄さんの「証言」に移りましょう。

國枝さんは一九四四年入局、前述の関谷則さんと同じ海外放送の亜州部に所属、後に編成部に移りました。「……それである、一番有名な録音盤

の、兵隊がNHKへやってきて騒いだとき、あの日は僕はNHKにおったんですけど、というのはいま、放送が十二時にやることはもちろん分かっていて、それに内容も分かって居た（中略）そういう意味では終戦前後の情報は十日頃から、それに十三日の御前会議もボツダム宣言受諾の動きも手に取るように分かっていたわけですよ」

國枝さんの「証言」はこのあと、GHQの指導によるクォーターシステム（15分番組編成）の確立、アメリカ流番組の導入などの話題から五〇年のレッドパージ事件に及びます。

NHK退局後、國枝さんは開局したばかりの名古屋の中部日本放送東京支社に入社します。出発したばかりの民放にとってはアメリカ流が既に定着していたNHKの放送ノウハウはまことに貴重なものでした。「証言」では放送部長として報道態勢の確立、CBCのみならず民放各局による共同制作の開発などが語られます。やがて國枝さんはCBCの社長、会長まで昇りつめることになりました。

結び。柳沢さん、秦さんの場合もそうでしたが、NHKに吹き荒れたレッドパージの嵐で局を去った人々は、結果的に民放草創期の地固めと後の発展に寄与した人材となったり、制作プロの母体作りに関わりもして放送文化の基盤を創ってきたと言えます。限りなく大きな足跡はある意味で歴史の皮肉という気がしないでもありません。

「放送人の証言」は放送の歴史を放送現場の生の声で後世に残し、語り継ごうという趣旨で今なお収録作業は続いています。事務局にご一報あればVTR鑑賞の便宜を図ります

新刊紹介

「越境する作家 チェーホフ」
牧原 純（島地純）著

「いいお天気だこと……蒸し暑くはないし……」と、美貌のエレーナが呟くと「首を吊るにはいい日和だ……」とワニヤがまぜっかいした。

（戯曲「ワニヤ伯父さん」より）
有名なシーンだ。

この書はチェーホフ44年の生涯とは《旅》であり、世紀への《越境》と捉らえ、悲劇と喜劇、天国と地獄、平安と絶望、オペティミズムとニヒリズムがないまぜの「チェーホフは汲みつくせない」（スタニスラフスキー）全貌を彫琢した評伝文学。チェーホフ・ファンに一読を薦めたい楽しい読み物でもある。（M）
（東洋書店 1800円）

元TBSディレクター
『ラジオの学校』河内紀 著

スタジオとデンスケ、編集室にスコッチテープ。スプラインシングに鉄とデルマト鉛筆……音は多様に変容し、言葉が乱舞する。河内紀は、60年代から70年代にかけてラジオの本質を問い続けた言葉の魔術師だった。
ラジオドラマや録音構成といった既成のジャンルに閉じ込められた「音」を解放し、言葉の営みを模索し続けた

劇団ストイックスティック 第10回公演

☆ 事務局の小坂理紗子嬢出演！
～ 劇団ストイックスティック公演～

バッタさんの
どこまでもおじやましマッシュュ!?

2004年6月11日（金）～15日（火）
しもきた空間リパティ
アクセス：小田急線・井の頭線/下北沢駅下車 南口から徒歩1分
世田谷区北沢2-11-3 イサミヤビル4F TEL 03-3413-8420
※1Fは雑貨のお店「カーニバル」です。

前売2200円 当日2500円 全席自由 日時指定
（筑摩書房刊）
D・J：小坂理紗子！
（毎水曜20:00～20:59生放送）
番組『Stand Beat Station』で
レインボータウンFM(79.2Hz)

出演▼ 小玉慶晴、佐丸徹、外間勝、若林史子、渡邊衛
池下慎也、長谷川（A）（forming Company 7425689）、植松久恵、小川拓哉、木金隆浩、小坂理紗子、田村通隆、ながたしゆん、森山太、山岡由佳、他

番組が『ことばの交差点』（68年4月～69年3月）であり『ヤング・パンチ・シリーズ』（68年4月～12月）だった。それらの音の記録は消されて無い。河内は虚空に去った音の数々を、残された台本を手掛かりに復元の書とした。それが『ラジオの学校』である。単なる回想の記録ではない。書齋の書でもない。実践による「音」の文明論として彫拓した書である。

きいたふうなラジオ論は幾多あるものの、これほど本質に迫った音における民俗論を知らない。みだりに消費する饒舌に身をまかせるラジオの風潮への痛烈な、かつユーモアにみちた批判の書として登場した。

ラジオ現場必読の書といっている。

会報掲載用・放送人の会会員一覧(2004年4月末現在)

合川明 青木裕子 赤井朱美 秋田完 新井和子 安楽城格 有馬哲夫 石井清司 石井ふく子 石高健次 石橋冠 磯野恭子
 磯村健二 市岡康子 一色伸夫 伊藤雅浩 井上欣也 井上良介 岩澤敏 岩下恒夫 上田千秋 上野満 碓井広義 歌田勝彦
 宇野昭 生方恵一 浦田彰 江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子 大蔵雄之助 太田敬雄 大原誠 大原れいこ 大山勝美
 大類啓 岡弘道 岡崎栄 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明 小川秀夫 沖野暁 萩野慶人 小田昭太郎 加賀美幸子 各務孝
 片岡敬司 片島紀男 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫 金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫 上安平冽子 鴨下信一
 河合肇 川口和久 川口健一 川口幹夫 川尻順一 川竹和夫 川野楠巳 川平朝清 河邑厚徳 河村正一 岸田功 北川泰三
 北川信 北出晃 北村美憲 北村充史 木村栄文 木村成忠 木元教子 楠美昌 工藤英博 国枝忠雄 小出五郎 児玉久男
 児玉孝光 後藤多聞 近藤晋 今野勉 斉藤守慶 斉藤伸久 斉藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江正 坂元良江 桜井元雄
 迫田朋子 笹川紀久雄 佐々木彰 佐々木欽三 佐藤年 佐藤利明 沢口真生 澤田隆治 沢田隆三 重延浩 静永純一
 渋谷康生 島地純 島野功緒 清水満 下川靖夫 下重暁子 習田豊 城菊子 菅野高至 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典
 鈴木道明 鈴木紀郎 鈴木典之 須磨章 せんぼんよしこ 高尾正克 高島秀之 高橋一郎 高橋啓 高橋泰 滝大作
 武谷雅博 田澤正稔 只野哲 田中昭男 田原英二 田原茂行 千葉勉 露木茂 鶴橋康夫 土居原作郎 戸田佳太 外崎宏司
 土門正夫 中川幸美 中澤忠正 中島僚 中田美知子 中谷英世 中津川輝夫 長沼士朗 長野克亮 中村敦夫 中村克史
 中村季恵 中村耕治 中村美美子 永守良孝 新村もとを 西ヶ谷秀夫 西川 章 丹羽美之 根津武夫 野崎茂 野田宏一郎
 信井文夫 萩野靖乃 橋口義春 林勝彦 林裕史 原由美子 原田庸之助 久野浩平 備前島文夫 一杉丈夫 深町幸男
 福田雅子 藤井潔 藤井チズ子 藤代勝博 藤田晋也 藤久ミネ 星田良子 堀川とんこう 松浦幸一 松尾羊一 松田輝雄
 松平定知 松前洋一 松本明 松本修 松本国昭 三上義智 三国章 水上毅 水野憲一 満島保夫 三村景一 三村千鶴
 宮川鏡一 宮脇巖雄 明神正 村上紘一 村上雅通 村上佑二 村木良彦 銘刈栄昌 桃井章 森川時久 諸橋毅一 矢島良彰
 藪内広之 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田良明 山田尚 大和定次 山名光紀 山根基世 山本恵三 湯浅和憲
 横山英治 吉永春子 吉村直樹 吉村誠 和田智允 和田光弘 和田洋一 佃 由美子 以上226名(2004年4月末現在)

新会員紹介

左記の方々が入会されました。

中澤忠正 元テレビユー山形社長

信井文夫 映像新聞社会長

中村敦夫 参議院議員

諸橋毅一 ヴィック代表取締役

西川章 緑山Sスティー業務部長

杉田成道、フジ編・制局 E・P

新村もとを TVマン・ユニオン

林裕史 山陰放送東京支社長

大類啓 東北映音社長

岡村黎明 大東文化大学講師

放送人句壇

康夫 咏める

(または拜句、盃句、輩句、這句、
 稗句、灰句、廢句、松尾馬笑選)

散る白梅身を翻して紅梅に

一望の春爛漫の孤独なり

夏日なり 露に鶯風ぐるみ

追伸のような試写会ミモザ咲き

突風や花吹き上げる花の中

犬が行く我追い越して夏風に

過剰なり腹に肉あり更衣

はなみずき幼きくらいあどけなし

酒もだめ煙草も駄目な犬がいて

投 鶴橋康夫

編集後句

ジジイが二人、ワープロ・パソコン
 の打ち手が疲れ、五七五の悪戯を。

シメ切りに追いかけられる薄暑かな
 午後6時 日は高けれど校了す

投稿に思わず涙 目に青葉

霞み目に誤植・脱字のちらつきて
 視郎

霞み目に誤植・脱字のちらつきて

夏空に照れて首途のグランプリ

ありがたや 校了合図の酒二盃

馬笑

注 視郎(伊藤雅浩)馬笑(羊一)

いずれも季語・季題無視の酒気帯び

戯れ句のお粗末のべけんや。

口直しに再度鶴橋康夫の旅情句を。

◇ロケハンで津和野、萩探索にて

萩の春 黒い板塀夾竹桃

もう一度 桜散ります松陰碑

幽閉の三疊の間に日脚あり

春山に光芒放つ生命見る

◎ 放送界俳壇の名手 西川章さん

(俳名 阿舟)がみかねて入会してく

れました。

これを機に(放送人 句会)を立ち

上げてみてはの声しきり。

手初めに会員諸兄の名句、迷句

歓迎。まずはメール・FAXにて

事務所宛てご投句を是非々々。